

## カンムリゴケとニセツリガネゴケ:

## 山口県見島の水田にもあった

南 敦

山口県萩市見島は萩市の市街地の北側沖合にある弧島(有人島)である。萩港より船でちょうど2時間かかる。国土地理院発行5万分の1地形図では〔見島〕である。1983年(昭和58年)11月22~23日、山口女子大学名誉教授塩見隆行先生と見島の植物を調査するために島に渡った。見島の最北端の〔長尾の鼻〕近くの水田を歩いている時に、塩見先生が水を除いた水田で一面に生えた多数の小さなコケを見つけられた。水田の中のコケは珍しいので全く専門外の筆者も感心してくわしく見たり標本も採集したわけである。後に塩見先生から、あれはカンムリゴケ *Micromitrium tenerum* (B. S. G.) Crosby とニセツリガネゴケ *Physcomitrella californica* Crum et Anderson であると教えていただいた。見島は山口県では最も暖かいところでルリハコベ、ミヤコジマツヅラフジ、フウトウカズラなどを産する所である。水草研究会会報23号(1986年3月)で下田路子先生が「干上がった池の岸や底に生える小さな蘚類: カゲロウゴケとカンムリゴケ」を報告しておられるのを大変興味をもって読ませていただいたので、筆者も山口県のもを報告させていただいたわけである。

末筆ながら色々ご教示を頂戴した塩見隆行先生に厚く御礼申し上げる。

## 山口県にフサジュンサイの第二の産地

南 敦

山口県のフサジュンサイ(ハゴロモモ) *Cabomba caroliniana* A. Gray は岡国夫ほか編(1972)『山口県植物誌』によれば、山口市亀山(池)(三宅貞敏 1969. 8. 28 山口県立山口博物館標本所蔵)の記録があるのみである。

1985年(昭和60年)9月20日、山口女子大学名誉教授塩見隆行先生と山口県立宇部西高校教諭末広雄次先生の御二人によって宇部市西岐波区上の原〔5万分の1地形図: 宇部東部左上〕の池で発見された。その後、山口県立宇部高校山田孝先生によって詳細に調査された。同先生によれば次のようである。池の大きさは約500㎡、水田灌漑用の池で水深5m位、ジュンサイと混生している。堤防にはチガヤ、ススキが密生し、ヌルデが混入し

ている。水面にマガモが数羽やってきている。一方はアカマツ・コナラの若木の林、堤防の下は水田、一方はミカン畑、近くの大きな池にはタヌキモがある。フサジュンサイは約10㎡に密生し生育もよい。夏は水面全体に広がっていたが冬をこして水面近くのは少なくなっている。

筆者は1986年(昭和61年)3月20日、山田先生より3月18日採集の生標本を5本お送りいただき調べてみた。茎はどれもほぼ20cmで切られていたが、葉は全域に着生。茎の横断面はだ円形、長径2.0~2.5mm、短径1.5~2.0mm。葉は対生。茎の先端を除き節間は約3cm。葉の長さは3.5~3.7cm。葉柄は1.1~1.3cm。葉身は扇形で、半径2.3~2.5cm、掌状に分裂。裂片の幅は0.6~0.8mm。裂片の先端は鈍頭。注目すべきは大滝末男著『日本水生植物図鑑』によれば「種子または萌芽で越冬」と記してあるが、この生標本では全くそのような傾向はなく、春~秋の生長状態のまま越冬していたようである。採集地が暖かかったのであろうか。今後の調査研究がまたれる。ただし、茎葉のみを見たところでは全く標準的なフサジュンサイ(ハゴロモモ)のようであった。

末筆ながら生標本と色々ご教示をいただいた山田孝・塩見隆行・末広雄次の諸先生に深甚の謝意を表わす。

## 参 考 文 献

岡国夫ほか編(1972): 山口県植物誌。  
大滝末男・石戸忠著(1980): 日本水生植物図鑑。北隆館。

## イヌイトモの新産地

角 野 康 郎

イヌイトモ *Potamogeton obtusifolius* は、ヨーロッパ、シベリア、中国東北方、北アメリカなどに分布する狭葉性のヒルムシロ属植物である。日本では、北海道釧路市大楽毛と同厚岸郡厚岸町の2ヶ所から知られているにすぎなかった。昨夏、北海道を旅行した際、川上郡標茶町標茶で、たまたま通りかかった道路ぞいの沼にイヌイトモを発見した。この沼は最深部でも水深50cmもない浅い沼で、オヒルムシロ、ヒロハノエビモ、エゾヤナギモに混じって、所々に果実をよくつけたイヌイトモのバッチを認めることができた。日本での第3の産地とし

て報告しておきたい。

いまのところイヌイトモの産地は道東に限られるが、他の地方には分布しないのか、それとも気付かれていないだけなのかが気になる。北海道は広大で、まだまだ調査が行き届いていない地域が多い。資料がさらに集積されてゆけば、興味深い植物地理学上の問題が浮かび上がってくるのではないかと予想している。

## 再び水草の標本について

角野 康郎

この会報の第2号(1980)で、水草に関しては標本の蓄積がまだまだ不十分であることを述べた。標本の不足が日本の水生フローラの再検討や水草の植物地理学的研究を進める上で、ひとつのネックになっている実情を訴えたかったわけである。今、いくつもの県で植物誌の完成を目指して標本の収集が精力的に進められていることは確かだが、全国的に見れば、先に述べた実情に変わりはない。今回は、オオカナダモとコカナダモに関する資料でその一端にふれたいと思う。

次の表には5ヶ所の標本庫に所蔵されているオオカナダモ、コカナダモの標本点数を示してある(1986年2月現在; 同一標本庫における重複標本は全て1点と数えたが、交換により他の標本庫にも送られている場合は別個に1点と数えてある)。

	オオカナダモ	コカナダモ
東大資料館	4	4
国立科博	6	4
牧野標本館	3	0
京大・植物	15	26
神戸大・教養	56	87
計	84	121

オオカナダモ、コカナダモの異常繁茂、分布の拡大があれほど騒がれながら、残されている標本の記録は実に少ないのである。両種の異常繁茂が琵琶湖から始まったことを考えれば、東京の標本庫に少なく、関西の大学に多いことは納得がゆく。しかし、京大、神戸大ともに採集者はごく限られた人たちである。そのことがもたらす問題は、図1を見ていただければ明らかであろう。

図1は、コカナダモの分布図を先の表にあげた標本庫で確認できた標本のみにもとづいて作成したものである

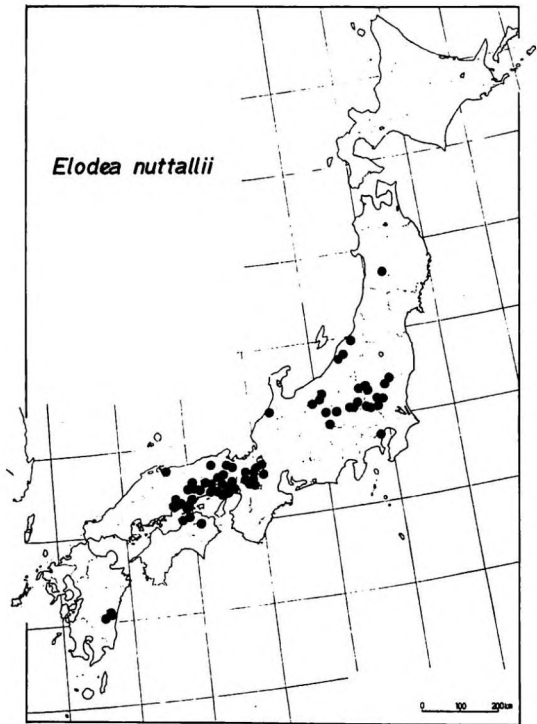


図1. 標本にもとづくコカナダモの分布図  
(角野、未発表)

(コカナダモの分布についてはいくつかの報告があり、その資料を採用すれば分布地点の数はふえる。しかしここでは「再検討の可能な標本に基づいて分布図を作成する」という原則に従う。文献の記録の有用性を否定するものではないが、一方で、かなりよく名の知られた分類学者の同定においてさえ、今なおコカナダモとクロモの混同がみられるという現実を心にためておく必要があろう)。

さて、この図がコカナダモの正しい分布を示しているかと問われると、答は否である。コカナダモの分布拡大が報告されている東海地方や愛媛県の点はひとつもないのである。この図は、コカナダモの実際の分布よりも、採集者の調査地の分布を示しているのかもしれない。例えば、兵庫県の南部に点が密集するのは、私個人の日常の調査地域であるという事実によるものであって、この地域が全国有数のコカナダモ繁茂地であることを示すものではなからう。逆に、点の打たれていない地域にコカナダモが産しないということも言えない。山口県から九州にかけて分布地点が少ないというのはどうも事実らし